

わたしを生きる

— 自分さがしと学びの意味 —

奥 村 和 滋

1 わたしを生きるために

(1) なぜ自分さがしが必要なのか

「わたしを生きる」というテーマは、いつの時代でも問われ続けてきた永遠の課題である。ことに若い人にとって、依存から自立への過渡期にある青年期の発達課題として「自分とは何か」「自分はどう生きるか」ということを見つめることは重要なことだといえる。今日の激動する世界情勢や家族の崩壊、価値観の多様化の中で、揺らぎのない確かなものが見えなくなってしまっている。何をしてもどうも私が生きていないというつかみどころのない不満感が心の底に残存している。反知性主義の時代の只中であって深い思索とは無縁であるかに思われがちな今日の学生たちだが、大人たち以上に「自分を生きる」ことを懸命に求めていると感じることは多い。

近年東京タワーやスカイツリーをはじめ京都タワー、大阪通天閣、アベノハルカスなど全国の観光タワーや展望ビルが人気を博して連日の賑わいをみせているという。人々はタワーやビルの上から一体何を眺めているのだろうか。高所から下界の道行く人々や車をぼんやりと見つめながら、実は自分自身をさがしているのではないだろうか。日頃の「生活」から一歩離れて、自分の「人生」を見つめるという自分さがしのひと時を現代人は自覚ないままに求めているのかもしれない。

人はなぜ自分を知りたいと思うのだろうか。ソクラテスの「汝自らを知れ」という哲学的な提言を待つまでもなく、自己認識は生活のすべての原点でもある。人は何かを選択するときには必ず自分に問い合わせている。食材の買い物においても、履修科目の登録においても、自分の内

なる思いに確認を取りながら外のものを選別しているのである。しかるに人は自分のことをどこまでわかっているのだろうか。考えてみれば、自分の顔すらも直接肉眼で見たことはなく、「鏡」を用いて鏡像として捉えているのである。鏡は果たして真実の顔を映してくれているのだろうか。

鏡が人を騙す魔力をもつことをメルヘンが教えてくれる。「鏡よ鏡、世界で一番美しい人は誰？」『白雪姫』（グリム童話）では、白雪の継母（実は元々は実母）は毎日魔法の鏡に問いかけ、自分の美貌が名指しされる度に満足げに頷いていたが、ある時から「白雪が一番美しい」という声に変わるやいなや、即座に部下に白雪を森で殺して肝を持ち帰るように命じた。白雪の誕生を心から喜んでいた母親の豹変ぶりには、鏡に操られ弄ばれる人間の悲慘が描かれている。『雪の女王』（アンデルセン童話）に登場する鏡は、価値を逆転させて映し出す鏡である。悪魔が作ったその鏡は、美しいものや良いものを醜く映し出し、逆に醜いものや悪いものを美しく映し出す。悪魔はその鏡に神の姿を映そうと天上高く神の居場所に近づいたとき、鏡像のあまりもの醜さのため鏡は木端微塵に粉碎してしまう。その破片が空を見上げていた少年カイの目に入った途端に、彼の目にする世界はすべて灰色の重苦しい光景に変わってしまう。

かつてフランスの女性哲学者シモーヌ・ベユは、「美しい女は鏡の中の自分の姿を本当の自分だと思い違いをしている。醜い女は鏡の姿が本当の自分ではないことをよく知っている」と語っている。（シモーヌ・ベユ『重力と恩寵』）

鏡が本当の自分の姿を映していないならば、人は自分の正体をほとんど知らないままに生きることになる。自分がこの世に出生することを英語では I was born. と受動態で表現するが、この作り手不明の受身形の表現の中に、その厳しい事実が反映されている。人間は受身で生まれ出て、のちに主体的に生きていく運命を担っている。ここに自分さがしが求められる理由があるのかもしれない。

(2) 自分さがしの二つの視線

自分さがしは次の二種類の視線から成り立つものとする。

- ① 自分は将来何になりたいのか。(未来への夢や願望)
- ② 自分はどうか生きろと呼ばれているのか。(人生からの呼びかけの声)

幼少時から私たちは家庭や学校で将来大きくなったら何になりたいかを幾度となく問いかけられ、そのつど自分の夢や願望を人に語りながら自らの意志を自問してきている。年齢や体験を経て自分になりたいものを幾度も変遷させながらも未来の人生に期待を膨らませている。そのこと自体は将来の可能性を開花させる原動力ともなるので、教育現場は子どもたちの夢を聞き出すことに熱心になりがちである。入試時の面接では、志望の動機や卒業後の進路の展望を問いただして、明確に答えるほどに高い評価を与えている。

しかし将来の夢や期待は、現在の自分の思いの枠組みに未来の人生と世界を閉じ込めていることも事実である。期待外れの思いがけない境位が自分の未来に待ち受けていること、そしてその事態が人を大きく変えて自分の知らない人生を展開させてくれるかもしれない。これが自分さがしのための二つ目の視線である。自分はどうか生きたいかではなく、どうか生きろと呼ばれているのか。人生からの呼びかけの声に耳を傾けること。自分を超えた何か大きなものとのかかわりから自分を見つめるという形の自分さがしである。

ヴィクトール・フランクルは人生の意味への問いのコペルニクスの転回の意義を主張している。(ヴィクトール・フランクル 『夜と霧』)

「人生から何を我々はまだ期待できるかが問題なのではなくて、むしろ人生が何を我々から期待しているかが問題なのである。」

我々が人生の意味を問うのではなくて、我々自身が人生から問われているという認識である。前者には自分の人生が自分のものであるという自己中心的な観点があるのに対して、後者は人生の根底であり本質であるところから問われた存在として自分の存在を捉えているといえる。

フランクルは強制収容所の体験をもとにして、人間を最後のところで支える内面的拠り所を見出してこそ、過酷な生活状況生き切ることができることを深く体得している。つまり、存在の意味の拠点に立って「なぜ」生きるかを見つめたうえで、「いかに」現実を生きるかが可能になるというわけである。

このことは私たちの普段の日常生活にも当てはまるだろう。「いかに」

生きるかは、「なぜ」生きるかと一体になっていないと、いずれ頑張り通す気力を失ってしまう。「なぜ」をつかむと「いかに」はどんな形にも適応できる。たとえ上手くいかない事態に合っても挫けることなく新たな方向を見出すことができるのだろう。自分さがしの二つのベクトルは協働することで大きな力を発揮することができる。

2 自分さがしと学びとの関係

(1) 「さがしています」

「なぜ」の問いかけは、私たちの日常の合間に思いがけないタイミングで割り込んでくることが多い。

シュヴァイツァーはアフリカの川を観光して河馬の親子が川岸の草を食んでいるのを見かけた時に、突如「生命への畏敬」という言葉が脳裏を貫いたという。すでに神学者としても音楽家としても名を成していた彼だったが、この不思議な声を受けて、悩める生命を救う道へと方向を変えて医者道を志すことになった。

魯迅は医師を志して日本に留学して医学を学んでいた。医者になって中国の人々の身体を治療して助けたかったのである。そしてその留学中に解剖学の藤野先生との感動的な出会いが彼の人生観を深めていくことになる。折しも幻燈事件という出来事で、彼は当時の中国の同胞たちの心の歪みと弱さに失望することになった。この時、身体よりも人々の心をこそ変革すべしという運命の声を耳にしたのだろう。彼は人々の良心を目覚めさせるべく、医学を諦めて文学の道を選び取った。まさにメスを捨ててペンを執ったのである。

小泉純一郎元首相は、現役を引退後に海外の原発事情を視察のために2013年フィンランドを訪れた。そこで原発の核廃棄物を完全に管理保管しているオンカロという地下施設を見学したとき、これまでの原発への信念を粉碎するほどの強さで人生の声を聞くことになる。原発から出た核廃棄物は10万年間も高濃度の放射能を出し続けるために、これを安全に隔離して管理するためにはオンカロのような地下深く掘られた頑強な倉庫が絶対に必要になってくる。しかし日本の国内にはどこを探しても10万年間も安全に管理できる場所は見当たらない。核廃棄物を安全に対処できない限りは原発の推進はありえないことを察した彼は、直ちに日

本原発政策に No を突き付け、反原発運動の旗手へと転身する。現役時代の念願をかなぐり捨ててでも、彼の人生からの声は安全への切実な叫びだったのだろう。

アメリカ人の詩人アーサー・ビナード（1967年米国ミシガン州生まれ）は、アメリカの学校で原爆投下の必要性和正当性を繰り返し教え込まれていた。大学卒業後に来日して広島を訪れ、被爆者の話を聞き平和資料館で展示物と対面したとき、これまでアメリカで教えられていた原爆の正当性が一挙に覆ることになる。資料館に何度も通い遺物と幾度となく対面するうちに、その声なき「ものたち」の声が聞こえてきた。じっと耳を澄ませば自分がその声の通訳をつとめることができる気がしたという。『さがしています』（童心社 2012）という写真集の中で、彼はカタリベの声なき声を言葉として記している。（資料館の2万1千点の中から14点）

その中で、ある中学生（山本達也くん）の学生帽からの声を次のように書き留めている。それは、戦後教育が、そして私たちひとり一人が、是非とも応答しなければならない「なぜ」の問いかけである。

べんきょう べんきょう べんきょうしなさい おとなたちは そう
ういていた。

タツヤという 男の子の うえにのって ほくは いっしょに 中
学校に かよったんだ。

8月6日のあさ じゅぎょうが はじまる まえに 校庭で とも
だちと シャベっていたら

ピカアアアアッと 光った。ほくは へばりついて タツヤく
んの 頭を まもろうと したんだ。

でも 頭ばかり まもっても いきのこれない。

なにを べんきょうしたら タツヤくんは いきのこれたか
ほくは さがしているんだ。

(2)「なぜ」への応答の試み

何を勉強していたらタツヤくんは生き残れたのか。なぜ彼は生命を奪われたのだろうか。そして子どもたちが笑顔で幸せに過ごせる世の中に

なるために、教育は何を教え学ばせていけばいいのだろうか。子どもたちの尊い生命と引き換えに人類に投げかけられたこの教育への問いかけは、戦後の教育界にとってきわめて深刻で重大な「なぜ」である。

この「なぜ」の問いに対して真剣に取り組むことをしないで教育の技術や方法をいくら論じても、根本的なことは何も解決されないだろう。「なぜ」なしに「いかに」ではごまかすことができないにもかかわらず、現代の教育界はこの問いをすっかり忘れてはいないだろうか。子どもたちに将来の夢や願望を聞き出す前に、大人も子どもも改めて平和の根拠への問いかけを自問するべきだろう。「わたしを生きる」ための自分さがしの可能性は、その先に開かれてくるものと思われる。

フロイトは「ひとはなぜ戦争をするのか」という「なぜ」の問いに対して、アインシュタインとともに誠実な応答を試みている。

1932年にアインシュタインとフロイトとが往復書簡を交わしてできあがったのが『ひとはなぜ戦争をするのか』という平和論である。（この書は出版後人の目にはほとんど触れることはなかった。当時台頭してきたナチズムに握りつぶされた世紀の戦争論である。2016年ようやく邦訳が出版されている。『ひとはなぜ戦争をするのか』A. アインシュタイン S. フロイト 講談社学術文庫 2016年）

アインシュタインは戦争は人間の心の問題だと考えて、心理学のフロイトに向けて「人間を戦争というくびきから解放できるのか」と問いかけた。それを受けてフロイトは、人間の心の中にエロスとタナトスという二つの欲動が共存していることを指摘する。エロス（生の欲動）が生の統一と保存の力であるのに対して、タナトス（死の欲動）は破壊と攻撃の力であり、これが生命を破壊し物質に戻す力として作動することで争いの根源になるという。すべての人間の心の中にこの二つの欲動が働いていることをふまえたうえで、フロイトは戦争を克服する方法を次のように提唱している。

- ① エロスの呼び覚まし： 恋愛も含めて愛の絆を強めて、一体感や帰属意識を高めていくこと。
- ② 文化の発展： さまざまな文化を学び知性を強めることによって、タナトスの攻撃方向を外から内へむけること。攻撃性が内面化されることで良心（道徳心）が目覚めてくる。また、文化によって知性

が高まると、個の尊厳（個人の自由、権利、義務）が意識されてきて、決して国家の手段にされてはならないことが自覚されてくる。

フロイトは文化が発展すれば、戦争を生理的に拒絶するようになり、心底から戦争に憤りを覚えるようになるという。文化の学びによって、厭戦・嫌戦感情が心の中で強められると考える。「文化の発展を促せば、戦争の終わりへ歩み出せる」という言葉で彼はこの平和論を締めくくっている。

知性と文化へのフロイトの強い思いと期待は、反知性主義に傾いている現代社会への痛切な警鐘ともいえるだろう。

(3) 学びは自分さがしである

この書は、当時の人類を代表する最高の頭脳であったアインシュタインとフロイトとが、教育の「なぜ」の問いかけに対して、平和への願いを込めて絞り出した応答の試みである。人間の知性は平和への希求のもとでこそ本物になるとすれば、今日の教育は知性の使い方を一面的なものに偏向させてはいないだろうか。損得勘定で役に立つか否かという功利を目的とする勉強によっては、タツヤくんの生命を救うことはできないだろう。

「勉強」という語について調べると、元々は商売用語であったものが、明治20年代以降に「学習」の意味で使われ出したといわれる。（佐藤学『「学び」から逃走する子どもたち』岩波ブックレット 2000年 p.54f）勉強という商品価値を高める営みが、いまや日本の学校文化の大勢を形作っていることは残念なことである。

さらに学という漢字の旧字体の「學」の字に注目して、学びの本来のあり方が語られている。（同書 p.57）「學」という字の上部の中心にある「𠂔」と「𠂔」は二種類の交わりを意味している。一つは学問や芸術や文化との交わりであり、もう一つは仲間同士の交わりである。また、學の字の上部の両脇にある部位は、子どもの二つの交わりをケアして導いている大人の両手だという。

この學の構造はフロイトの平和論と見事に符合している。人を愛し（「エロスの覚醒」）、文化にふれる（「文化の発展」）という二つの交わりを中核に置いて、それを平和を希求する掌（たなごころ）が包み込むこ

と。そこに本来の学びの本質があり、平和へのダイナミズムが息づいている。

功利的な価値を志向する「勉強」が人生の「いかに」を引き受けるとすれば、「学び」は人生の「なぜ」の呼びかけと真摯に向かい合っている。学びは自分さがしの原点であり、自分さがしが学びの原動力ともいえるだろう。日々の勉学の意味やあり方を、人生との存在関係という枠組みから見つめ直すことの意義は大きい。

＊本稿は平成29年11月の鹿児島高校での出張講義の内容に加筆修正したものである。

(鹿児島純心女子短期大学教授)